

技術的対象の現象学

—シルベール・シモンドン思想の射程 (2)—

廣瀬浩司

Printed by
K. K. BUNKEN-SHA
Chiyoda-ku, Tokyo

東京大学教養学部 外国語科研究紀要

第43巻 第2号 1995年

Reprinted from
The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literatures,
College of Arts and Sciences, University of Tokyo
Vol. 43, No. 2 (1995)

技術的対象の現象学

—ジルベール・シモンドン思想の射程 (2)—

廣瀬浩司

前稿でわれわれはシモンドンの個体化 (individuation) の概念に焦点をあて、その哲学的な意味を検討した。個体化とは、多数性と統一性を無限に媒介する作用であり、あらたな存在論を要求するものである。ところで個体化の作用は、技術的な活動においてもっともあきらかに現れるものである。そこで本稿では、シモンドンの『技術的対象の存在様態について (*Du mode d'existence des objets techniques*)』という書を個体化の概念を意識しながら検討し、前稿で予告した「存在の制度化の哲学」の可能性をさぐることにしよう。¹⁾

1. 技術と文化——機械学の課題

技術な対象の世界を意識化することによって、技術と文化 (culture) の対立を乗り越えること——これがシモンドンの技術論の中心的な主題である。ここにあるのはひとつの危機の意識だ。現代の文化は技術に対する防衛のシステムとして構成されてしまっており、技術にたいして固有な価値や認識は与えられていない。必要なのは、奴隷解放や人権の擁護にも似た努力によって技術的対象の意味を意識化することだ。そのためには技術に対する今日の見方を転倒し、「哲学的なまなざしの変更」(MEOT, 16) を遂行しなければならない。

この視点からシモンドンは、機械にたいする次の二つの矛盾した認識を乗り越えようとする。(MEOT, 10-11)

ある場合には、機械は人間が使用するたんなる道具 (outil) とみなされている。たとえば望遠鏡は、目という器官を外化・強化するものであり、自立した機能や固有の意味を持つものではない。人間は有用性 (utilité) と

いう原理にもとづいて道具を使用し、個性なきものにおのれの個性を付与するのだ。この活動を支えるのは、人間が一定の計画や精神的な図式を実現しようとする意志であり、究極的には自然支配の意志である。

またある場合には、機械の本質はその「自動性 (automatisme)」にあると考えられている。機械の進歩とは、人間の介入から自由な自動機械 (automate) を完成することだというわけである。この第二の態度はときに、外人排斥にも似た技術恐怖 (technophobie) としてあらわれることもある。機械がみずから意志を持つとまでは考えないまでも、機械によって人間の労働が置き換えられることへの恐怖をおぼえたり、機械を「人間的な」ものにしようとするのも、こうした態度の一貫である。機械と人間との関係の歴史は、機械化されていく人間労働と、機械の人間化の終りなき闘争であり、弁証法だと考えられるわけである。

シモンソンはこうした相互に矛盾した態度のいずれも、技術的对象の本質を理解していないと明言する。

彼によれば、第一の態度は技術の個性性を尊重せず、労働の概念に従属させてしまうものである。ここで言う労働とは、与えられた「質料=素材 (matière)」を起点に、一定の形式 (forme) を実現しようとすることであり、技術はこれら——実体的な——二項を媒介するものにすぎない。また、労働における形式は、人間の意志ないしは目的の表象に依存するものである。この場合、技術は、目的とその実現という系に組み込まれたひとつの契機にすぎない。人間の持つ科学的知のみが普遍的な形式であり、技術はその適用のための手段なのだ。

このように、労働概念はヒュレー・モルフェー主義の圏内にある概念である。労働に従属したものとしての技術は、有用性・合目的性 (finalité)・応用の可能性などの基準によって判断されてしまうのだ。

シモンソンの技術論がヒュレー・モルフェー主義の転倒をめざす作業の一貫をなすものだとするならば、このように技術を労働の一位相 (phase) と考えるのではなく、反対に労働こそが技術の一位相であると考えなくてはならないだろう (MEOT, 241) そのために必要なのは、技術的对象それじたいがはらむ作用 (opération) を主題化し、形相と質料との区別に先立つ「かたちの生成のはたらき (prise de forme)」を**あばきだして**いくことである。つまり、形相と質料の媒介として技術を考えるのではなく、こ

れら実体的な二項を技術的作用の抽象的な契機と考えるべきなのだ。目的とその実現、知とその応用という図式も同様に抽象的であり、これら二項を媒介する「あいだ」の時空間を記述することによって乗り越えられなければならない。これこそが後に検討する「技術的对象の現象学」の課題なのである。

こう考えてくれば、技術に対する第二の態度、すなわち機械を自動機械と考える態度も第一の態度の背面にすぎず、やはり技術的对象の本質をとらえていない。

まず、この考え方は機械の機能を狭くとらえすぎている。純粋に自動的な機械は、あらかじめ定められた機能しか実現できず、閉じたシステムのなかでしか動かない。だが機械に必要なのは、外部の情報にたいする感受性 (sensibilité) であり、状況の変化に対応するための「非決定性の余地 (marge d'indétermination)」なのだ (MEOT, 11)。人間はこの非決定性の余地に介する存在であり、そこにこそ新たな発明 (invention) の可能性も開ける。

第二に、この自動化 (automation) という考え方自体、技術的な世界に即して発想されたものではなく、経済原理など他の領域に由来するものである。たとえば職人労働から工場労働への移行、さらにはオートメーション化にともない、製品の規格化が進んだと語られることが多い。だが職人労働が「オーダーメイド」(sur mesure) であって、機械労働は規格品であるという対立そのものは、機械の本質とその発生には無縁である。オーダーメイドという考え方は、消費者の需要 (およびそれを支える経済原理) という技術外の基準にもとづくものであり、技術の発展にとっては非本質であるのみならず、車の付属品のように発展を阻害することもある。じじつ車のエンジンの発達は、純粋に技術発達が要求される分野、たとえば航空機の開発の成果などを利用することではじめて可能になったのだ。そもそも、オートメーションや流れ作業が規格化を可能にしたわけでもない。技術的对象そのものが内的な連関の緊密性を追求した結果、安定した (stable) 対象の生産が可能になり、オートメーションが生まれたのであって、その逆ではないのだ (MEOT, 24)。このように、機械を自動的なものとしてとらえる考え方は、経済や商業など技術の世界とは無関係な領域に由来するものであって、その本質に根ざしたものではない。

技術的対象を社会学や心理学から自由に、「それ自体において (en lui-même)」(MEOT, 15) 捉え、その進歩 (évolution) の様態を分析すること——この学問領域をシモンドンは「機械学 (mécanologie)」と命名する (MEOT, 48)。だが機械学は社会学や心理学に並ぶ新たな領域を開くだけではない。それは、技術を文化に統合することによって、世界にたいするまなざしを転倒する可能性をもはらんでいる。まずはシモンドンとともに、技術的対象という領域を確定するための方法を検討することにしよう。

2. 技術的対象の現象学——その両義性

シモンドンはあるところで自分の分析を「技術的対象の現象学」(MEOT, 244) と呼んでいる。この現象学を支えている方法は、一貫して発生論的な方法である。

従来の技術論は、ある道具の目的や用途に従って機械を分類 (classification) することで満足していた。²⁾ だがたとえばエンジンを考えたとしても、歯車によるもの、蒸気によるもの、ディーゼルエンジンなど、構造や機能はさまざまであり、これらを同じ種 (espèce) に分類することは必ずしも妥当ではない。エンジンという名の下に統括されているものは、さまざまな構造と機能を持った機械を包括しており、その個性 (individualité) は一定ではないのだ。

そこでシモンドンは問題を逆転し、このような個体から出発するのではなく、生成の視点から個体を分析すること、言い換えれば「個体化」の視点から機械を分析することを提唱する。

技術的対象の個性と種的特性 (specificité) は、発生的な諸基準から出発してこそ規定できる。個体としての技術的対象 (objet technique individuel) とは、今ココ (hic et nunc) に与えられたこれこれの事物ではなく、それについて発生があるようなもの (ce dont il y a genèse) なのだ。(MEOT, 20)

たとえばエンジンは、ある時間と場所に位置づけられた事物ではなく、過去のエンジンから現在のエンジン、さらには未来のエンジンに至る形式

のダイナミックな変化において——あたかも系統樹のごとくに——理解されなければならないのである。

さて、この技術的対象の本質を記述していくために、シモンドンは *abstrait* と *concret* という一対の概念を導入する。抽象的な = 分離した (*abstrait*) ものとは、ある機械内の諸要素が互いに独立・競合し相互に外在的な状態を指す。それに対し *concret* な状態とは、これらの要素が収斂 (*converger*) して、相互に互換的 (*compatible*) なものとなり、ひとつの構造的な統一体を形成した状態を指す。この語源的な意味を尊重して、*concret* という語を「凝集」と訳すことにしよう。³⁾

技術の進歩とは、抽象 = 分離から凝集への移行、凝集化 (*concrétisation*) のプロセスである。個体化論の用語を使用して言い換えるならば、技術的対象の個体化とは、各要素間に内的な共振 (*résonance interne*) があるようなシステムの形成過程なのである。シモンドンはこの過程を、エンジンの進歩の例を挙げて説明している (MEOT, 20-26)。エンジンのシリンダーヘッドには空冷用のひれ (*aillette*) が立っているが、初期のエンジンではこのひれは外部から付加されているかのような構造になっていた。それは冷却というひとつの機能しか果たしていなかったのである。それに対し最近のエンジンでは機械的な役割もするようになり、ガスの圧力によるシリンダーヘッドの変形を防いでもいる。

技術の凝集化の過程を見きわめる際にシモンドンが重視するのは、このように要素が多機能化し、相互に収斂していく過程である。初期のエンジンは、凝集化したエンジンに比べ、より多くの材料を使うばかりでなく、より脆弱でもあった。エンジンの進歩は、このような技術的対象の内的な欠陥を、収斂に基づく新たな構造の創出によって解決していく過程である。凝縮化は純粋に内的な運動であり、経済など外部の原因によるものではない。

要するに、ある機械システムの「個体化の条件」(MEOT, 28, note) とは、システムの内的な「非-互換性 (*non-compatibilité*)」(MEOT, 27-28) を、収斂によって解決していくことにある。そして内的収斂による新たな構造の到来は、システム内に過剰なものとしてあるポテンシャルによって可能になるのであり、これこそがシステムの生成の原動力なのである。

実在的なシステムは、本来的には過飽和 (sursaturé) であり、ポテンシャルに満ちており、統一性 (unité) 以上のものであって、内的な非-互換性を内蔵している。システムの生成によって、このシステムにとっての互換性が発見され、構造の到来 (avènement) による解決が構成される。このときにこそ発生があるのだ。ここで構造化とは、準安定性 (métastabilité) の均衡の基礎となるような、ある組織 (organisation) の到来のことである。(MEOT, 155)

こう考えてくれば、凝縮化とは、あらたな構造の「到来」という一連の非連続的な出来事をはらみながら「構造化」していく、過剰なシステムの生成のことなのである。

この点に関連してシモンドンは、機械はたんに収斂するばかりではなく、複雑化もしているのではないかという反論に答える (MEOT, 31-32)。二極管から三極管、さらには四極管という真空管の進化の歴史をたどってみるならば、それはたしかに複雑化と分化 (différenciation) の歴史である。しかし陽極と陰極との間にグリッドや静電格子が挟まれ、さらにこれらが分化していく過程は、たんなる複雑化ではなく、それぞれの要素が多機能化し、より凝集化した構造を形作ることによって、それまで障害になっていた二次的な効果が消滅していく過程なのである。言い換えるならば、技術的な進歩は、収斂と分化という一見矛盾した二つの運動を関数に規定されるようなものである。

技術の進化の過程は 自己収斂、自己適応 の過程であり、同時に 自己分化 の過程である。このように、技術的対象とは、生成と存在、出来事と構造、連続性と非連続性、分化と収斂という両面をはらんだ、本質的に両義的な対象なのである。

3. 技術的対象とその環境

これまでの分析においてシモンドンは、機械学の研究領域をひとまず確定するために、技術的対象の存在様態をそれ自体において規定しようとしてきた。次の課題は、この対象が外部の自然的な環境とどのような関係を持つのか、ということである。

この問題に取り組むにあたっては、シモンドンが高度の凝集化を果たしているものとして挙げている、ひとつの例を検討するのが適当であろう。これは Guimbal タービンと呼ばれているものである。このタービンは水圧管の中に浸っており、発電器に直結している。この発電器はごく小さく、圧力を加えられたオイルに満ちたクランク室に収納されている。シモンドンが注目するのは、この発電器が水とオイルという自然的な環境との間で見事に内的な共振を実現していることである。まず水は、タービンと発電器を動かすためのエネルギーをもたらすと同時に、発電器にたまった熱を逃がす役割も果たしている。他方オイルは、発電器を潤滑にすると同時に、その圧力によって水の進入をふせいでいる。このように、水とオイルはそれぞれ多機能的であり、かつ相互に収斂しているのである。(MEOT, 54-57)

この場合エンジンという技術的な個体と、水やオイルという自然的・物理的 (シモンドンはこれを地理的と表現している) 環境との関係はどのようなものなのだろうか、そしてこの関係のどこに「発明 (invention)」の契機を見いだすことができるのであろうか。

生じている技術的な問題は、水の浸入からの防御と熱の拡散という二つの問題を同時に解決することである。この点についてシモンドンは、このエンジンが実現する「凝集化は、問題が解決していることを前提としているような発明によって条件づけられている」(MEOT, 55) ことを強調する。言い換えるならば、エンジンとその地理的環境 (水とオイル) との凝集化が可能になるのは、この凝集化がまさに作り出す新たな条件によるのであり、すでに与えられた条件に適応することによるのではない。「水圧管へのエンジンの挿入は、同時に水によるエネルギー冷却を可能にすることによって、自己自身を可能にする (se rend possible elle-même) と言っても過言ではないだろう」(MEOT, 55)。完成したときにはじめて安定する円天井のように、技術的な対象はおのれの機能がうみだす結果によって条件づけられているのだ。

技術的対象は自己自身の地理的な環境を、自己自身で作り出すこと——これがシモンドンによれば技術的な発明の中心的な性格である。発明とは、すでにある環境によって条件づけられるものではなく、技術と自然の混合体 (mixte) であるような、新たな環境の創造なのだ。技術的対象はそれ

自体で「構築的」(MEOT, 56)であり、おのれが進化していく為の目的と条件をみずから創出していくものなのである。

さて、技術的对象の自己条件付け (auto-conditionnement) というシモンドンの命題は、二つの伝統的な対立を揺るがすものであると思われる。

(1) 潜在的なものと現実的なもの

技術的-地理的環境という混合的な環境は、たしかに構築されるもの、創造されるものである。だがこれは無からの創造ではまったくない。この環境の素材 (matière) は、すでに自然の中に与えられる物質的なもの以外のもではなく、創造される環境は自然の中にすでに「潜在的なもの (virtuel)」(MEOT, 58) としてあるからである。言うなれば、技術的環境の発明は、潜在的なものによる現実的なもの (actuel) の条件付けによって可能になるのだ。

この潜在的なものは、シモンドンが「前個体的なもの (préindividuel)」と呼び、メルロ=ポンティが「肉 (chair)」と呼んだ、力学的な地 (fond dynamique) のことである。それは形相と質料、技術と自然とを媒介する第三の地平における、「かたちの生成のはたらき」を準備する実在的なポテンシャルなのだ。

システムのポテンシャルは、たんに未来の状態が潜在しているということではなく、未来の状態を存在へと押し進めるような実在 (une réalité qui les pousse à être) である。生成とは潜在性の顕在化でも、顕在的な諸実在の競合の結果でもなく、その実在性においてポテンシャルを所有しているシステムの作用 (opération d'un système possédant des potentiels en sa réalité) なのだ。生成とは、あるシステムの構造化の突発の系列 (la série d'accès de structurations d'un système) のこと、あるいはあるシステムの継起的な個体化のことである (MEOT, 155-156)

システムが所有するポテンシャル、これをシモンドンは——メルロ=ポンティ同様——「自然」と呼ぶ。自然とは、「ポテンシャルの貯蔵庫、フュシス」(MEOT, 203) である。それは「すべての形式のシステム」であり、「形式のさまざまな傾向が共有している貯蔵所 (réservoir commun des

tendances des formes)」(MEOT, 58) なのだ。この諸形式の形式こそが、突発的な発明の**実在的な**潜在性として、形式の個体化の条件となっているのだと言えよう。

ただしすぐに注意しておかなければならないが、シモンドンもメルロ=ポンティも、こうした自然の生産性を実体化し、なにやら神秘的なエネルギーのようなものとして提出してはいない。それは発明という**特定の**場面のみ確認される実在であり、実践と飛躍を通してのみ見いだされるすぐれて技術的な作用なのである。

ポテンシャルな潜在性の概念がつねに特定の (particulier) ものであることを指摘することは、本質的に重要である。(……) ポテンシャルは実在のある領域のポテンシャルであって、それが形成する安定したシステムの実在全体ではない。あまり指摘されてはいないが、こうした潜在的な性格は、技術性に由来するものである。(……) 技術的な活動は、技術的な行為の下でいまも顕在化しようとしている潜在性に、今ココで出会わなくてはならない。潜在性は、挿入され、位置づけられ (localisé), 特定の**なもの**である。(MEOT, 204)

潜在的なものは、実在性の影のごときものではなく、システムの実在の特異な様態のひとつである。それはひとつひとつの技術的な行為によってのみ顕在化するような、システムの変容の原理なのだ。技術的な活動とは、システムの**特異な点**に実践的に働きかけることによって、この潜在性の地平を顕在化することである。だが、それが潜在していたと言えるのは、つねに技術的な発明が行われた後にすぎず、顕在化のひとつひとつはあくまで予測不可能で不連続的な出来事として現出するのである。

前稿でも強調しておいたことだが、シモンドンの前個体的なものの存在論は、このようにあくまで**間接的存在論**として理解されるべきであろう。それは逆説に満ちた緊張の場を**今ココ**においてとらえるために導入されている考え方なのである。

(2) 現在と未来のキアスム

容易に予想できるように、この第一の攪乱は時間的な次元の攪乱に結びつく。潜在性の現実への作用は、同時に未来の現在への作用、いまだ存在

しないものの現在への作用であるからだ。未来はシステムのポテンシャルとして、顕在化なものと同程度の実在性をもって潜在している。発明とは、いまだ到来してはいないが、すでにあるこの未来への飛躍である。この飛躍は、それが作り出す未来の環境によって動機づけられ、正当化されるような飛躍なのだ。

シモンドンの技術論のひとつの大きな貢献が、技術に固有な時間性を記述した点にあることは多くの論者によって指摘されている。⁴⁾ 技術の時間は、未来と現在との循環的な運動——メルロ＝ポンティの用語で言えばキアスム——である。技術的な発明とは、この未来と現在との結節点において両者を媒介する臨界的な出来事であり、たんに点的な出来事ではない。この循環的な時間性の地平においてこそ、発明という飛躍はおのれの条件をみずから創造することができるのだ。

シモンドンは別のところで、ある技術的な発明について絶対的な起源を語るができるか、という問題について論じている (MEOT, 41-49)。彼によれば、この飛躍こそ、ある発明の起源というべきものである。しかしながらこの飛躍は過剰な潜在性の顕在化であり、つねに他の一連の発明をひきおこす限りにおいて起源であるようなものだ。それはみずから多数化し、おのれが創出するものそれぞれに——地平として——現前している限りにおいて、起源であると言われる。技術の時間は、発明という一連の臨界点によってリズムを付けられて多数化しながら、同時に収斂するような地平的な時間なのである。

ここでひとつの疑問にこたえておかなければならない。さきにエンジンの例でみたように、技術対象はそれを構成する要素を収斂させ、上位のシステムを作り出すと同時に、かつて分離していた要素に廻行的に働きかけ、それらを再分化し、再配分するような対象である。だからこそ技術の対象の進化においては、分化と収斂はひとつの運動だと言いうるわけだが、このように分化と収斂を組み合わせることによって自己の環境を非連続的に作り出していく運動が生体の適応 (adaptation) の過程——およびその時間性——と類比的であることに、シモンドンは無自覚ではない。じつ彼は技術の対象を記述するにあたって、しばしば生体との類比 (analogie) に頼っているのである。⁵⁾ だとするならば、シモンドンの技術論の意義はたんに機械を生物とみなすこと、生物的な時間性で技術の進歩を説明しよう

とすることにあるのだろうか。

たしかに生体においても、新たな器官 (organe) の発生は適応のための飛躍であり、自己の潜在力の多機能的な実現である。「器官はそれ自身の条件である」(MEOT, 56)。技術とその環境との関係は、生体とその環境に類比的であり、シモンドンの語る前個体的なものは、一種の生的なエネルギーや無意識の情動性なども類比的なものではある (MEOT, 59)。その意味で機械学は、一種の「一般器官学=装置学 (organologie générale)」(MEOT, 65) なのである。

にもかかわらず——この点がサイバネティクスとシモンドンを隔てる点でもあるのだが——、彼は器官と機械との根本的な相違も強調する。技術の進歩とは、ある生物の種が器官を作り出し、新たな種の祖となり、さらにその新たな種において新しい器官が作られていく過程に類比的ではある。しかし生物においては、ある器官とある種とを分離することはできない。それにたいし技術的な世界では、要素を分離し、種を異にする他の機械に接合することは不可能ではない。これが「産み出されたもの (engendré)」と「生産されたもの (produit)」の違いなのだ、とシモンドンは言う (MEOT, 67)。技術の対象の「寸断された身体」は、他の機械に接合できるのだ。

ここで注目すべきは、この特徴によって技術的世界は「空間的な次元に加えて歴史的次元を持つ」ようになる、とシモンドンが述べていることである (MEOT, 67)。機械は、他の機械の要素を組み込むことができるだけでなく、かつて頓挫し放棄された発明を取り上げ直し、それに新たな意味を与えることもできるのだ。このように技術的時間は生物的時間に比べ、より非連続的であると同時に、より累積的 (cumulatif) である。それは一連の危機的=臨界的な状況や新たな構造の創出のみならず、固有の伝統をも備えている、と言うこともできよう。このように危機と回帰をとまなう「鋸の歯 (dents de scie)」のごとき運動のことを、シモンドンは「緩和時間」(temps de relaxation) と呼び、こうした時間性は技術に固有なものだと言う。⁶⁾ それは純粋に自然的な時間のように連続的なものでもなければ、純粋に歴史的な時間のように非連続的な出来事の系列でもないからだ。

このようにシモンドンの技術の現象学は、歴史的時間と自然的時間とのあいだに第三の時間的な地平をひらく。それは両者のからみあいの場であ

り、発明とは、この二つの時間を縦につらぬいて横断する、垂直的な時間の結節点なのである。

4. 機械と人間の連結

ここで機械と生体とのもう一つの相違を指摘しておかなければならない。機械は生体と異なり、人間の介入を必要とするという点である。

すでに述べたように、シモンドンは機械の本質を自動性と考える立場を否定していた。機械は——発明されたものである限り——つねに「非決定性の余地」をはらみ、外部に開かれた個体である。人間の操作も、まさにこの非決定性の余地を軸に機械に介入する。前節で示したように、技術的行為とは、システムの特異な点を実践において見きわめることによって、その潜在的な生成の能力を顕在化させることである。そのために人間は、技術をたんに使用するのではなく、技術的作用と同じ水準に身を置き、それとコードを共有し、共同作業を行わなければならない。こうした人間と機械の関係をシモンドンは連結 (couplage) と呼んでいる。

人間と機械のカップルによって、人間だけあるいは機械だけの時に比べて、よりうまく、またより繊細に、同じ自己規制の機能 (les mêmes fonctions auto-régulatrices) が果たされるとき、人間と機械とのあいだには間個体的な連結 (couplage interindividuel) があるのだ。(MEOT, 120)

問題は人間の機械化でもなく、機械の人間化でもない。これらは両者の連結関係を主題化できないことに由来する疑似問題なのだ。両者の連結をこそ一次的なものと考えべきであり、これら二項はその抽象的な二極端にすぎない。

それでは人間と機械とのこの連結関係において、人間はいかなる役割を果たすのか——この視点から、いくつか問題を整理することにしよう。

(1) 情報とその両義性

機械と人間を連結させるもの、それは情報である。ここで情報の持つ両義性・二面性を——前稿につづいて——強調しておく必要があるだろう。

当然のことだが、情報とはそれが獲得される瞬間においては、つねに出来事的なもの、偶然的なものである。完全に規則的なものには情報としての価値はない。それが謎めいた符牒として現れるからこそ、人間はそれを解読すべく動機づけられる。しかしそれは純粋なカオスでもない。それはいまだ存在していない規則に従うものであるかぎりにおいて、解読可能な情報としての価値を持つのであり、伝達可能なものとなるのだ。情報は規則性と偶然性という両義性を備えている。

シモンドンは、情報が人間にたいして持つこの両義性をも、徹底的に技術に内在したものと考えようとする。一般には、情報を情報たらしめる二面性は、人間の表象活動との関係で考えられてしまっているからである。すなわち、人間がある目的のために物質=素材 (matière) の中にあるメンタルな図式を投げ込み、そこにひっかかってくるものが情報だというわけである。こうしたヒューレー・モルフェー主義的な認識においては、機械はこの目的の実現のための手段であり、せいぜいのところ、情報を蓄積するための場にすぎない。機械そのものにおいては、情報と構造とは同質 (homogène) であって、価値を創り出すのは、人間が潜在的にあたまのなかで表象している図式と、入手ずみの情報との差異だということになってしまう。

それに対しシモンドンは、個体における情報と構造との本質的な異質性を強調する。

個体においては、顕在的な構造 (structure actuelle) と獲得された情報とのあいだにある種の空白 (marge) が残存する。獲得された情報は構造に対して異質 (hétérogène) なのであり、その結果、存在を継起的に作り替えること (des refontes successives de l'être) と、おのれ自身を疑問に付す能力 (le pouvoir de se mettre en question soi-même) が必要になってくるのである。(……) 記号 (le signal) とは、実際の結果とめざされた結果との隔たりの記号ではなく、二つの目的性 (finalité) のあいだの非対照性の記号である。第一の目的は、構造というかたちで実現された目的であり、もうひとつは、情報の総体に内在する目的である。この場合情報とは、いまだ謎めいているが、価値を付与されている (valorisé) ようなものなのである。(IPC, 273-

個体としての機械は、それじたいの中に、構造と情報という二つの異質な目的性をはらんでいる。それらのあいだにはつねに「非決定性の余地」が介在し、システムの潜在性と関係している。人間の役割は、機械内のある「臨界的な時期や臨界点」(MEOT, 141)においてこの非決定性を位置づける (localiser) こと——あるいは、機械との連結関係において、機械に位置づけさせること——にある。

情報を受容できる機械とは、さまざまな可能性を持つ感度にあふれた瞬間において、非決定性を時間的に位置づけるような機械のことである。(MEOT, 141)

この意味で情報とは、人間と機械との能動的な関係の記号である。情報は両者のあいだの時空間に謎めいた記号として現れる。人間は「技術的構想力 (imagination technique)⁷⁾」を媒介にそれを解説し、システムの潜在的な生成の能力をそのつどの実践によって顕在化することで、新たな構造化への道を開いていくのだ。

(2) 技術的行為とその規範性

この分析は、人間の行為の構造そのものにも、新たな光を投げかけてくれる。

機械は、人間の労働のたんなる手段とみなされるとき、情報をもたらしてはくれない。労働はある生産物を産み出すことで過ぎてしまい、生産物はしだいに労働から距離をはらんでいくからだ。労働とその生産物は相互に外在的なものであり、両者の出会いは、そのつど点的な出来事にすぎない。

それにたいし技術的行為は——それが発明的なものであるとき——、対象において蓄積され、定着し、新たな発明の可能性を充電する。発明という出来事に結びつきながら、ある種の安定性と時間的持続をはらんだもの、これこそが情報である。技術的行為は、この情報を媒介に、それが作り出すものと内在的な関係を保っている。その結果、労働とことなり、技術的行為による構築 (construction) の活動は「行為の反作用 (la réactivité de l'acte)」の意識を持つことができるのだ。

構築の活動は、人間にその行為の實在的なイメージをあたえてくれる。恒常的な媒介のおかげで、現在構築の対象となっているものは、のちの構築のための手段となるからだ。個体がおのれの行為の反作用の意識を持ち、おのれ自身の規範となりうるのは、技術的な努力の時間という、連続的で開かれた体制 (régime) のおかげなのである。(IPC, 264)

このように技術的行為は、それに内在する規範性 (normativité) をはらんでいる。それはみずからおのれの規範を作り出すような行為なのだ。といっても、技術的行為はまったくの無秩序、アノミー状態ではない。それが発明的なものとなりうるのは、それが安定した情報を産み出し、システムの潜在性を特定の点において顕在化するときだけだからだ。技術的行為とは、技術的構想力の「図式 (schématisation)」(MEOT, 264) に基づいて、情報という固有のシンボルを産み出す行為である。メルロ＝ポンティの言葉を借りるならば、技術的行為とは「おのれの道をみずから作り出しながら、おのれに回帰するような歩み⁸⁾」なのである。

(3) 共同体とその外部

技術的行為はおのれに内在する規範性を作り出し、安定した情報をもたらすこと——このことはもうひとつの重要な帰結をはらんでいる。情報とは、時間的な持続性と同時に、他者への伝達可能性をも備えているのだ。情報は、発明の産物を伝播させ (propager)、放射する (rayonner) (IPC, 266)。たとえば広告の効果は、かならずしもたんなる需要の動機付けとして、社会学的・経済学的に説明し尽くせるものではない。それは、「技術的な原型 (archétype)」にもとづいている限りにおいて、「認知的な構造の配備 (aménagement de structures cognitives)」の役割をも担っているからだ。技術の対象に内在するこの伝播能力のことを、シモンソンはあるところで「光暈効果 (effet de halo)」と呼んでいる。⁹⁾

したがって、技術的な対象は、おのれの環境や規範をみずから作り出すばかりではなく、おのれの享受者や使用者をも作り出すような対象である。労働の産物が他者にとって外在的なのにたいして、技術の対象は来るべき他者によって「参与可能 (participable)」(IPC, 264) なものなのである。

この問題に関してシモンソンは、共同体 (communauté) と社会 (société)

という重要な区別を導入している。共同体とは、個人にたいして外から強制される義務のシステムであり、社会学(主義)的な分析の対象となるものである。それに対し、社会とは、個体の行為に内在する規範のシステムであり、技術的情報のつくりだす「超個体的(transindividuel)」な関係の総体である(IPC, 247)。だから技術的な発明は、共同体的な義務の体系を逸脱するような新たなコードの創出の可能性をはらんでいるのだ。

閉じられた共同体へ新たな規範性を浸透させるのは、技術のおかげなのだと言いつてもよからう。技術的な規範性は、閉じられた社会の価値のコードを変更する。それはさまざまな価値の体系が存在するからであり、すべての閉じられた社会は、新たな技術を許容することによって、この技術に内在する価値を導入し、おのれの価値体系のコードを新たに構造化するからである。(IPC, 265)

技術的な発明は、共同体を越えたものを作り出すことによって、義務の体系には支配されない新たな超個体的な関係を創出する。それは発明の能力が伝達される場にほかならないのだ。

このように言ったからといって、シモンドンの共同体と社会、閉じられた社会と開かれた社会とを、たんに対立させていると考えてはならないだろう。問題は、経済・政治の共同体にたいして、情報社会やそのネットワークを対置し、後者を理想化することにあるのではない。なぜなら、「すべての社会的な集団は、共同体と社会の混合体」(IPC, 265)であるからだ。たしかに両者は本質的に異質である。しかし、完全に開かれた社会など理念的にしか存在しない。たとえ存在したとしても、それは臨界点を欠いた、平板なネットワークのシステムになってしまうだろう。

したがって、シモンドンの技術の現象学の課題は、共同体と社会という二つの要素を見きわめながら、共同体の外部への通路をいわば内側から開いてやることにあるのだ。言い換えるならば、共同体の上にもうひとつの社会を重ねて置くのではなく、共同体とその外部との結節点をひとつひとつ見きわめていくことによって、その潜在性を顕在化することなのである。社会とは、この特異な結節点においてのみ、その都度われわれに現出するようなものなのだ。

ここでもシモンドンの方法の間接的な性格を強調しておく必要があるだろう。閉じられた共同体にたいして、技術の進歩とその解放の能力を理想化するべきではない。制度化の哲学者としてのメルロ＝ポンティの言葉を再び借りるならば、開かれた社会が、閉じられた共同体より「真(vrai)」であると言うことを可能にするような規範はどこにもないのだ。我々に言えるのは、共同体が「より偽であり、より狡猾(artificieux)であり、より豊かさの少ない未来にたいして、より少なく開かれている」¹⁰⁾ということだけなのである。

結論——技術の現象学と制度化の哲学

本稿において我々は、シモンドンの技術の現象学の間接的な性格を強調しようとしてきた。その結果技術的对象は本質的に両義的なものとして現れた。

まず、技術の時間性は、歴史的な時間と自然的な時間とのあいだに第三の時間性を導入するものである。それは現在と未来が、発明という特異な出来事を媒介に、循環的にからみあう時間なのである。

また彼の現象学は、社会学の対象となるような義務の共同体でも、たんに心理学的な諸個人の融合体でもない、第三の社会を浮き彫りにするものであった。だがこの社会は実体的なものとしては決して現れず、内側からの分析によってのみ、間接的に現れてくるような社会であった。

最後に彼の分析は、人間の行為の新たなモデルをも供給してくれた。それは、発明という飛躍を通して、おのれの規範性をみずから作り出す行為であり、それを持続的なシンボルとして結晶化させるような行為であった。

このようにシモンドンの哲学の間接的・両義的性格を強調することによって、我々は——前稿とおなじく——シモンドン哲学がメルロ＝ポンティの制度化の哲学のひとつのモデルを提供することを示そうとしたのであった。たしかにメルロ＝ポンティ自身は、知覚の現象学に並ぶような、技術の現象学を展開してはいる。にもかかわらず、50年代に制度化の概念を提唱するとき彼がめざしていたものは、システムにおいてみずからの規範を創り出すような行為のモデルであった。制度化する行為は、出来事であるとともに一定の持続性と規範性を備える行為であり、他者にとって能動的に取り

上げ直される潜在性をはらんだ対象を生み出すような行為だったのである。この潜在性を現象学的な世界として捉え直し、その存在論的な地位を検討することが、彼の晩年の思索の主題である。したがって、シモンドンの哲学を經由することによって、我々はメルロ＝ポンティの晩年の存在論を美学や思弁に閉じこめようとする解釈をしりぞけるための一種の治療薬を手に入れることができるだろう。¹¹⁾

しかしシモンドン自身にとって、技術的对象の現象学はそれ自体で哲学的な価値を持つものではなかった。それはより広い、人間学的な分析の序説にすぎなかったのだ。

技術的对象の現象学は、人間と技術的对象の関係の心理学のなかに延長されていくことになるだろう。(MEOT, 244)

『技術的对象の存在様態について』という書の第三部の冒頭において、シモンドンは技術的对象の現象学そのものを、より広い「発生的な哲学の人間学」(ジルベール・オトワ)の中に解消させようとする。¹²⁾ 技術的对象がその外部とどのような関係を持つかという「側面的な(latéral)」(MEOT, 154) 分析では不十分である。こうした間接的な方法はいまや放棄されなければならない。技術性の発生などそのわずかな一部でしかないような広大なプロセスの中に統合されなければならない。技術的对象は、人間の思考の総体のなかでその意味を問われなければならないのだ。

こうして第三部で開始される発生的な哲学的人間学は、魔術に始まり、技術と宗教に分岐し、それらが美学によって媒介されていく過程を追っていく。シモンドンがめざすのは、美学が不十分におこなっているこの宗教と技術との媒介を「哲学的直観」によって完遂することなのだ。

こうした壮大な人間学のヴィジョンについては、ここで詳しく論じることにはできない。しかし、ある意味では容易に図式化可能なこのヴィジョンの奇妙な平板さについては、前稿に引き続いて疑問を提出しておかなければなるまい。技術はいまや、宗教と並ぶ人間学的発生の一位相にすぎない。ここでは技術の形象的＝図的(figural)な側面、すなわち形式にかかわる側面が強調され、発明にかかわる潜在性の地(fond)を暴き出す役割は、どちらかといえば宗教にゆだねられてしまっている。(MEOT, 208) さら

に、美的なもの(esthétique)との関係では、技術の役割はますます縮小していく。形相と質料との間のダイナミックな作用を主題化し、個体の作用を真に活用しているのは、技術よりは芸術だとされているのである(MEOT, 198-200)。この過程においては、技術は美的活動を通してしか、宗教——すなわち潜在性の地平——と交流できないとまで言われているのだ。(MEOT, 188)

ここでシモンドンは、技術的对象から出発して文化を捉え直すのではなく、人間的な実在という、すでに個体化された実在から出発して、技術を眺めてしまっているように見える。文化そして人間的実在そのものは自明な個体であり、それを問いただすことができるのは哲学的直観だけなのだ。

こうした思考にたいして、たとえばブリュノ・バラディが人間的思考の「技術的次元への帰属」をあらためて強調し、技術がはらむ「思考の複数的な萌芽」を尊重することを提案しているのは、じつに正当な主張と言うべきであろう。¹³⁾ 技術に人間的な要素を見いだすのではなく、人間の思考と文化の非-人間的な次元を発見しなければならない。そして、「脱主体化され、脱精神化された思考」、「物質的思考(pensée matérielle)」の発見をめざさなければならないというわけだ。人間と呼ばれているものは媒介のひとつにすぎず、結晶の萌芽と等価なものにすぎない。技術こそが、こうした複雑性の萌芽をあらゆる領域において追跡するものなのである。

だがこのように技術の持つ複數化機能を過度に強調化しすぎると、技術がはらむもうひとつの側面、すなわち持続性・伝達性が切り落とされてしまうであろう。また人間の媒介者としての役割のみを強調するならば、情報はいったい誰に対して意味を持つのか？ 誰が発明するのか？ といった主体に関する問いが残されてしまう。そもそも技術的对象の生成を概念を使って分析し、それを記述する権利はどのようにして基礎づけられるというのだろうか。

こう考えるならば、シモンドンが技術論の第三部で展開している文化の発生論的分析において我々が取り上げるべきものは、その人間学的な側面ではなく、——前稿でもすこしふれた——諸位相の理論である。それは、「諸存在の発生を追い、それぞれの存在をその統一の水準において把握すること」(MEOT, 236)をめざすものだ。言い換えれば、各構造の相対的な

自律性や規範性を十分に尊重しながら、そこに不連続的な出来事の湧出を見きわめることによって、「諸存在の発生」を内側から追跡していくことなのである。

だからシモンドンが特権化する哲学的直観と呼ばれているものも、哲学的な概念による体系化と対立するものと考えべきではないだろう。むしろ、観念論のように存在を要素に分割した上で概念的な作用を持ち出すことは避けねばならない。シモンドンの哲学を真に評価するために必要なものは、発生的分析の手段としての概念の発生そのものについての思索であり、潜在的なものを哲学的に言語化するための方法の模索なのである。

概念こそが、観念的な互換性 (compatibilité notionnelle) を制度化する新たな表象である。(MEOT, 206)

この場合概念とは、非-互換性を一時的に統合するもの、要するに情報に類比的なものと考えられている。¹⁴⁾ それは、絶えることなき媒介作用が経由していく、システムの結節点の記号なのである。シモンドンはみずからの叙述そのものの意味についてはほとんど語っていないが、哲学的直観とは、たんなる無限の媒介作用でも、自然との直接の一致でもないだろう。それは、概念を通して間接的に特異な出来事の湧出に立ち会い、概念によってそれを言語化する役割を持つ主体のモデルを提供するものなのではないだろうか。

要するに概念とは、哲学が世界と内的に連結するために発明する、技術的な対象なのである。

注

- 1) シモンドンの作品を引用するにあたっては、前稿の略号を引き続き使用する、IPC: *L'individuation psychique et collective (L'individuation à la lumière des notions de forme, information, potentiel et métastabilité)*, Aubier, 1969. MEOT: *Du mode d'existence des objets techniques*, Aubier, 1958, 1969, 1989, préface de John Hart, postface d'Yves Deforge.
- 2) MEOT, 48, 81. シモンドン以前の機械学の試みの歴史的な分析としては、*Du mode d'existence des objets techniques* に付けられた、Yves Deforge による後書きを参照されたい。(MEOT, 269-331)

- 3) 「concret とは *concretum* ということだ。つまり、自立した (se tenir) ものであり、そこでは諸部分のどれも他と完全には分離していないが、おのれの意味を喪失することはない」(«Entretien sur la mécanologie avec J. Le Moyne», cité dans Gilbert Hottois, *Simondon et la philosophie de la «culture technique»*, Bruxelles, De Boeck Université, 1993, p. 58, note.
- 4) Bruno Paradis, «Technique et temporalité» in *Gilbert Simondon, Une pensée de l'individuation et de la technique*, Paris, Albin Michel, 1994, pp. 220-238; Bernard Stiegler, *La technique et le temps*, 1 (La faute d'Épiméthée), Paris, Galilée/Cité des Sciences et de l'Industrie, 1994 など参照。
- 5) Cf. MEOT, 58, 125, 137.
- 6) 緩和現象とは、あるサイクルにおけるシステムの状態が、次のサイクルのきっかけとなるような現象であり、サイクル間に非連続な臨界点を持つことにおいて、振動 (oscillation) とは区別されている。(MEOT, 260)
- 7) 「我々は技術的構想力というものを、要素の技術性にたいする特異な感性によって規定されたものとして考えることができる。この技術性への感性によってこそ、可能な集合の発見が可能になるのだ。発明者は無から創造するのでも、物質から出発してそれに形式を与えるのでもなく、すでに技術的な諸要素から出発し、それらを組み込むことができるような個体的な存在を発見するのである」(MEOT, 74).
- 8) Maurice Merleau-Ponty, *Signes*, Paris, Gallimard, p. 91.
- 9) G. Simondon, «L'effet de halo en matière technique : vers une stratégie de la publicité», *Cahiers philosophiques*, 43, juin 1990, p. 17.
- 10) M. Merleau-Ponty, *Résumés de cours*, Paris, Gallimard, 1963, p. 65.
- 11) *Ibid.*, pp. 59-61. また、メルロ=ポンティの『眼と精神』(*L'Œil et l'esprit*, Paris, Gallimard, 1964) という論考は、思弁的で、美学の領域に存在論を閉じこめるものと見えるかもしれない。だがメルロ=ポンティが『眼と精神』において語っているのは、絵画の技法 (techniques) の問題であり、その門環状の歩み (un cheminement en cercle) (p. 92)——つまりシモンドンが『岩の歯のごとき運動と呼んだもの——なのである。我々は絵画という技術の制度化の哲学として、この論考を読み直さなければならぬ。それに対し初期の論考 (たとえば『セザンヌの懐疑』) は、より心理学的であり、表現論的であり、人間学的である。この点については、拙稿「Les phénomènes d'institution—Le point nodal de la pensée de Merleau-Ponty», *Études de langue et littérature françaises*, n° 68, 1996 (印刷中) を参照。
- 12) G. Hottois, *op. cit.*, p. 70 et sqq.
- 13) B. Paradis, *op. cit.*, p. 233.
- 14) 「概念とはアプリオリでもアポストリオリでもなく、現在の (a praesenti) なののである。なぜなら、概念は個体より大きいものと、個体より小さいものとのあいだの情報的で相方向的なコミュニケーションだからだ」(IPC, 66).